

創立者たち — 風雪に耐えて —

16mm カラー 38分

■ あらすじ ■

この映画は、困難をきわめた日本の製酪業の歴史的な発展を、その創立者たちを通して描いたものである。

日本における酪農と製酪技術の誕生は、明治初期に、いわゆるお雇い外人の指導によって、官業で起きているが、順調には発展しなかった。北海道は、その主要な舞台だったが寒地稲作の発展によって、稲作が主になっていく。しかし、その稲作も、度重なる冷害凶作を受けて、再び酪農の復興が唱えられるようになる。その酪農の復興と、製酪業の発展に尽くしたのが、宇都宮仙太郎、黒沢西蔵である。

黒沢は若き日に、足尾鉍毒事件で知られる田中正造に愛され、被害民の救済に奔走し、やがて北海道に渡って、宇都宮牧場の牧夫になった。後に独立して、自らも牧場をもち、牛飼いの農民を糾合して、デンマーク農業を、範として、「農民のつくったものは、農民の手で売る」という北海道製酪販売組合の工場生産と販路開拓に成功する。しかしながら、大衆が、バターにもチーズにも馴染みがなかった大正時代において、それらの販売には、非常な苦勞をとまった。

そのような彼を、製造技術面で助けたのはアメリカで製酪技術を勉強して帰った若い佐藤貢と、販売面で片腕になった瀬尾俊三で、この三人の人間を通して、前述の歴史を描いている。

■ 見どころ ■

1. この映画は、戦後、日本人の食生活の変化によって、大きな発展を遂げる日本の乳業の、明治末から大正時代、さらに昭和も戦争前までの、いわば創業時代を如実に描いている。
2. その創業の精神は、あくまで農民のためのもので、田中正蔵翁から受けついだ農本主義が、創業者たちのバックボーンになっている。
3. したがって、日本の製酪業の歴史的な発展を具体的に知るとともに、創業者の苦心、創立の精神（初心）、企業の社会的責任、などを考えさせる上で、一企業にとどまらず、広く職業人の教育に役立ち、ひいては、職業生活の真の向上に資するものともなるだろう。企業の良心、企業の社会的な責任が今日ほど問われている時代はない。これは、その点、まれにみるすぐれた創業であった。
4. この映画の形式は、記録映画で、当時の貴重な写真、ニュースフィルム等を、丹念に蒐集して、歴史的にも貴重な映画になっている。

■ この映画の企画について ■

この映画は、日本の製酪業の貴重な歴史が創立者たちが非常に高齢に達したために失なわれることを恐れて、企画したもので、黒沢翁を中心に、三人の創立者たちの歴史的な証言を主として構成した。この歴史的な北海道製酪販売組合は、惜しいことに戦争中、国策によって統合、合併させられ、北海道興農公社となったために、幕を閉じている。したがってこの映画は、北海道製酪販売組合の最後の株主総会における黒沢氏の、「一粒の麦は死んでも……」という有名な言葉で終わっている。

戦後は、北海道興農公社は、占領軍による集中排除の政策で、小さな沢山の会社に分割され、やがて、その幾つかが合併して今の雪印乳業株式会社として再生しているが、それには映画では触れなかった。

これらの先覚者たちの足跡は、単に一企業の歴史をこえた不屈の人間たちのドラマである。

■ 略年表 ■

- 一八八五年 黒沢西蔵 生まれる
- 一八八九年 宇都宮仙太郎 札幌で市乳、バターの販売開始
- (明24)
- 一八九九年 足尾鉍毒事件
- (明32)
- 黒沢、田中正造を訪ね、鉍毒被害民の救済に発心
- 一九〇四年 日露戦争
- 一九〇五年 母死去 黒沢 北海道に渡り宇都宮牧場に牧夫として住み込む
- (明38)
- 一九〇八年 黒沢 札幌市内で牛乳の販売開始
- 一九一三年 北海道大凶作、宇都宮・黒沢、冷害凶作救済会をつくる
- (大2)
- 一九一四年 第一次世界大戦
- 一九一五年 梅枝夫人と結婚、札幌牛乳販売組合を設立
- (大4)
- 一九一七年 札幌酪農組合と改称
- 一九二三年 宇都宮仙太郎、佐藤善七らと北海道畜牛研究会をつくりデンマーク農業の紹介につとめる
- (大12)
- 一九二五年 北海道製酪販売組合を創立
- 一九二六年 北海道製酪販売組合連合会（酪連）に組織変更、会長宇都宮仙太郎
- (大15)
- 一九二八年 アイスクリームの製造販売をはじめる
- (昭3)
- 一九三一年 満州事変
- 一九三三年 チーズの製造開始
- (昭8)
- 北海道酪農義塾設立
- 一九三五年 黒沢、酪連会長になる
- (昭10)
- ロンドン市場にバター輸出開始

■ 製作スタッフ ■

製作	村山英治
脚本・演出	村山正実
撮影	村山和雄
音楽	山内忠
編集	沼崎梅子
解説	川久保 潔
企画	雪印乳業株式会社
製作	株式会社桜映画社

桜映画社